

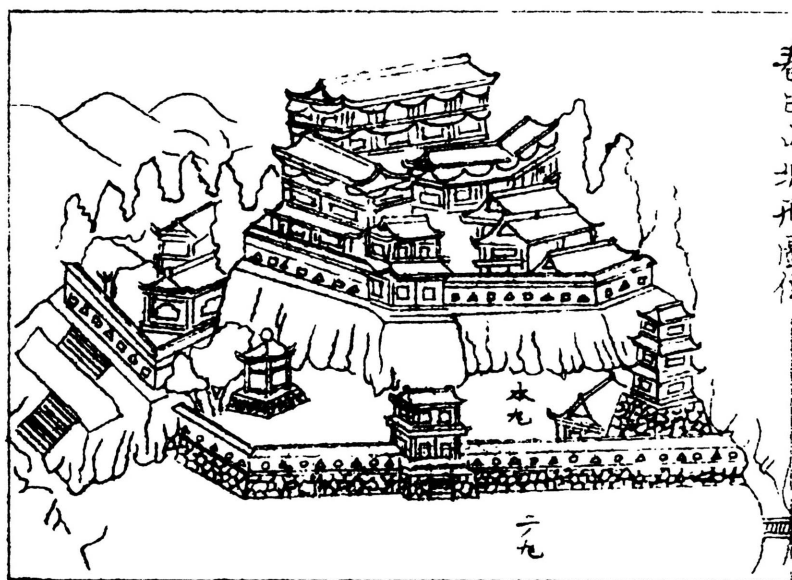
はまゆうと桜貝と

海光るわが故里



第十七号

鵜沼を語る会



春日山城形圖傳

(寄稿)

写真展「鵜沼の50年」と私の写真

福地 誠一

「くげぬまの50年」展（9月16日～18日、於鵜沼公民館）はお陰様で大成功に終わりました。

3日間の全会期中、推計1、000人を越える参観の方がたと、世話人役を買って出られた方がたに厚く御礼申し上げます。

然し五十年とは我ながら驚きました。昭和初期あの写真を撮っていたころ、まさか五十年後に、この写真で展覧会のようなものをしよう等とは思ひも寄らぬことでした。自分も随

分古くなったといまさらのように痛感します。

だが私の写真はもつと古いのです。大正11年、私が13才の頃、時恰も日本は素人写真と称するアマチュア写真のブームが、ピークに達した頃でした。

雑誌「少年倶楽部」にまで「写真の現像と焼き付けの仕方」という記事が載り、これを読んでカメラが欲しくてたまらなくなり、東京深川に住んでいた自分は、銀座4丁目までカメラを買いに行つたことを覚えています。

それは箱形の所謂ボックスカメラで、値段は4円50銭でした。正直のところこのカメラは玩具に等しいもので、満足なものは撮っていません。

翌大正12年、母親にせがんで、大枚13円50銭の大金を出させ、ヴェストコダックを買ったが、半年後には例の関東大震災で、東京は火の海と化し、カメラも焼いてしまいました。

それから約9か月間、私の写真のブランクが続きましたが、翌年国産の機械

を買って、以来、今日まで60余年、だらだらと牛の涎のように何の野心もなく、ひたすら万年アマチュアの道をよくも飽きずに歩き続けてきたものと、自分ながら呆れ返っています。

然し、この長い年月の間に分ったことは只一つ、趣味事は長年、時には一生続けないとその深奥を極めることはできない、というこ

とでした。

私は今日でも、撮影から引き伸ばしまで一貫して自分の手でやっていて人に任せません。それは青年時代に読んだ入門書に、引き伸ばしをマスターしなければ自由な表現は望めないと書いてあり、引き伸ばしに於ける様々な技法が述べられていたことが、自家引き伸ばしの大きな魅力となったからでしょう。

それで今日でもモノクロに専念しています。モノクロ独特の美しさ。一般には余り分らないかな！

—— 完 ——

(昭和58年9・30 原稿受領)

堀一族の越後支配時代

伊藤節堂

(はじめに)

越後の国の支配者といえば、誰でも即座に上杉謙信と答えるであろうし、あの有名な川中島の場面が目の前に浮かんで来ると思う。

私はここに「堀一族による越後支配」を表題として掲げたのであるが、堀氏とはいったい誰のことか、そしてそれはいつ頃のことかなどとあるいは首をかしげるかもしれない。

それほど、上杉謙信という人物があまりにも偉大であることから、その名声の蔭にかくれた堀

一族を越後の歴史の中から見失ったという感じがしてならない。

一、謙信の死と家督争い

天正6年(1578)3月13日英雄上杉謙信が49才の生涯を閉じた。

当然のことながら家督相続の争いが起きた。

養子景勝と養子景虎との争いである。

景勝は坂戸城主長尾政景の二男で永禄2年

(1559)に養子となった。24才であった。

景虎は小田原城主北条氏康の七男で三郎

氏秀、元龜元年(1570)に養子となり、謙信か

ら景虎の名をもらった。25才であった。

天正6年5月景勝は御館城(直江津)に景

虎を攻める、景虎は破れて鮫ヶ尾城(新井市)

に退いたが城主堀江宗親の謀叛にあつて自害した。天正7年3月24日のことである。

二、慶長3年の大異動

堀一族の越後支配は、慶長3年4月2

日付秀吉の朱印状により、堀秀治が春日城主になった時から始まる。

（秀吉朱印状）

其の方家中、侍の事は申すに及ばず、中間・小者・下男其の外奉公人たる者、一人残らず召し連れ、越後へ罷り越すべく候、自然罷りさざる族これあるに於ては、先先出し追ひ、成敗を加うべく候。但し検地帳面に相付け百姓の儀は、一切召し連れ間敷く候也

卯月二日

秀吉朱印

（堀秀治）

羽柴久太郎どのへ

慶長3年正月秀吉はまず、会津城主蒲生秀行を宇都宮に移す。つぎに、春日山城主上杉影勝を会津120万石に移した。

そして越前北ノ庄堀秀治を春日山45万石に拔擢し、越後の国守とした。若冠23才であつた。

さて、越後の国主となつた堀秀治は、越後を支配するために、一族や家臣を越後の国内の重要地点に配置した。

（実は頼勝が正しいという）

まず、与力大名村上義明を加賀小松6万5千石から、越後村上9万石に移した。

同じく与力大名溝口秀勝を加賀大聖寺4万4千石から越後新発田6万石に移した。

秀治は家老の堀重政を越後三条5万石に据えた。重政は嫡子直清を城代として三条城に

おき、自分は家老として春日城に入った。

堀重政は奥田七郎直純の子で堀久太

郎秀政を主人とした。のち、秀政が北の庄城主となったところ堀の姓を名のった。

つぎに、秀治の弟堀美作守親良を長岡蔵

王堂4万石城主とした。

また、家老堀重政の次男堀直奇を、六日町

坂戸2万石城主とした。

三、秀吉の死と堀一族

堀氏の越後支配の布石が滞りなく終ってか

ら4か月後豊臣秀吉がこの世を去った。

秀吉に一身を捧げ、秀吉によって大名に取

り立てられ、この度春日山45万石を与えら

れた堀氏にとっては大きな衝撃であった。

城主秀治は急遽一族を集めて協議した。家

老堀直政は天下の推移を洞察して、太閤取立

ての大名でありながら、宗家安泰のため、徳

川に味方することを進言し、これに決した。

やがて、慶長5年9月関ヶ原の戦いとなり、

東軍の勝利となる。

四、堀家騒動

慶長11年(1606)5月、春日山城主堀秀治が

31才の若さで死去し、嗣子忠俊12才が継いだ。

翌慶長12年築城中の福島城(直江津)

が竣工して、忠俊以下春日城から移る。

その翌年、慶長13年2月、家老堀重政が

病気のため福島城で死去した。行年62才。

ところが、この家老職をめぐって、長子直

清（三条城主）と次子直奇（坂戸城主）との争いとなった。慶長15年（1610）閏2月2日、

この争いは、駿府において家康が直裁す

るところとなり、直清を非として三条5万石は没収、身柄は出羽の最上義光に預けた。

直奇は坂戸城5万石から信州飯山4万石に減封された。

このことは宗家堀忠俊16才にも及び、若年にして一族を統率する能力なしとして、越後福島城45万石を没収、身柄を鳥居忠政に預けた。

この処分が決まるとすぐ翌3月付で、家康の6男松平忠輝を、川中島から福島城45万石に移動した。

外様大名の取りつぶしは、関ヶ原以来常に

家康の胸中にあつたことであろうが、堀氏の身内争いは、はしなくも、家康にとっては、またとない機会と口実を与えてしまったのである。

ここで、堀一族による越後一国の支配時代は終り、徳川の親藩または譜代の大名にとつて代わるのである。

しかし、堀一族が越後からまったく姿を消したのではない。村上城主10万石堀直奇は、わずか25年間で終るが、村松藩3万石、堀氏は230年間、椎谷藩1万石、堀氏は250年間と、明治維新に至るまでその歴史がつづくのである。

—— 完 ——

堀
一
族
に
関
係
の
あ
る
城

越後における堀一族と所領の変遷

(斯波・奥田・堀氏の系譜)

(あながき)

日頃不勉強の私が、あえて「越後の堀氏」に挑戦したのにはわけがあります。

会員奥田直元さんは鵜沼で生まれ、鵜沼で育った生粋の鵜沼っ子ですが、祖先が遠く越後の堀氏の血を引く縁りの方であることをチラッと耳にするに及んで、にわかには堀一族に興味を覚え、そのルーツを探った次第であります。

徳川300年の治世のなかで、豊臣恩顧の大名、つまり外様である村松藩堀氏、椎谷藩堀氏が、かつては堀氏の与力大名であった新発田藩溝口氏とともに、一度の転封もなく明治維新に至ったことは、幕府に対しても、また領民に対しても、施政のよろしかったことを物

語るものとしみじみ思うものであります。

(文献)

太田 亮 「姓氏家系大事典」

人物往来社 「読史総覧」

吉川弘文館 「明治維新人名事典」

小学館 「日本の歴史」(大名)(江戸幕府)

平凡社 「日本歴史地名大系」

吉田 東伍 「大日本地名辞書」

山田 源行 「郷土史辞典」(新潟県)

渡辺 慶一 「我が町の歴史」(上越)

新潟高校教育研究会 「資料新潟県史」

鈴木 針三 「村上城主代々記」「村上市歴史散歩」

堀 直敬 「堀家の歴史」

(昭和58・9・15記)

昭和 5 8 年 1 1 月 8 日発行

鵜沼を語る会

藤沢市鵜沼海岸 2 - 1 0 - 3 4

鵜沼公民館内

電話 3 3 - 2 0 0 1、2 0 0 2